
駆け落ち地獄

傘月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

駆け落ち地獄

【Nコード】

N29440

【作者名】

傘月

【あらすじ】

ニートのダメ彼氏でもどうしても好きで離れられない。例え精神が崩壊しても好きなものは好きでどうしようもない。いつか浮上するのをずっと待っている。そんな女心を吐露したような形の小説です。

「駆け落ち地獄」

名前を呼ばれて入ると、白を基調とした清潔感のある部屋の奥、どこにでもあるような事務用のステンレス素材でできた長い机の向こうに白衣を着た男性が座っていた。机には少し古いグレーのパソコンとカルテと思われる紙にペン立て。壁には白地に黒文字、祝日は赤文字で印刷されたカレンダー。製薬会社の企業名が一番下に記されている。精神科は初めてだったので少し不安だったが、普通の診察室で安心した。

そちらへどうぞ、と促され、机の前にある丸い椅子に座る。

「本日はどうされましたか？」

恰幅のいい、黒ぶち眼鏡の目じりが垂れてほんわかとやさしい、クマのプーさんのような白衣の男性は机の上で手を組み、柔らかいほえみを浮かべ優しい声で私に聞いた。白衣の襟元から紺色のトレーナーが覗いている。その胸元に何かが見える。

「最近、ちょっと眠れなくて。」

「そうですか。何か、そうですね日常生活などで、ストレスを感じることはありますか？」

男は言いながら、ペン立てからペンを出し、カルテに何か書き始めた。わずかに動いた胸元から先ほどの何か、がチラリと見えたがそれが何かまでは分からない。

「仕事先で、まあ、少し。」

「詳しくは、話したくないですかね。」

少しなんてもんじゃなくいろいろある。有閑マダムとその娘の横暴さ、「すいません」というと「申し訳ありません」と言い直させられる会社の体質。雑誌特集にもなるほどのアパレルブランドに派遣社員としてでも就職が決まったときは飛び上がるほど嬉しかったが、現実には酷いものだった。

……それに、結婚も考えている彼氏が無職でふらふらしているという。もう一年近く仕事を探しているというのに一向に見つかる気配はない。本当に探しているのだろうか。疑心暗鬼に陥る。

ただそんなことをこの医者に話して分かってもらえるのだろうか。

「人間関係とかです。ちょっとうまくいなくて。」

とつさに出た言葉は百点満点だった。人間関係、たった四文字だが全てを表現している。そう人間さえこの世にいないければこんな煩わしいことには関わらずに済むのだ。

「うーん……話すことでストレスが解消することもあるので、ね。」

「はあ。そうですね。」

「……とりあえずストレスや不安感が収まる薬と、軽い睡眠導入剤をお出ししますね。」

医者はそう言うたパソコンに向き直り何かを入力し始めた。画面がこちらからでも見えるのでチラリと見てみると、どうやら処方箋のようで薬の名前が映し出されている。医者に向き直り胸元を見たが何かはやはりよく見えない。

「ストレスや不安感が収まる薬も少し眠気が出るので、お車を運転する際には吞まないようにして下さい。一週間分お出しします。」

キーボードを叩きながら医者は言い、入力が終わりこちらへ向き直した。ちらりと私の手元を見る。

「えっと、婚約者の方がいらっしゃるのでしょうか？」

にこやかに医者はそう言った。ふと手元見ると、左手薬指に指輪が光っていた。

「あ、いや、婚約はしてなくて、彼氏、とのです。」

「ああ、それは失礼しました。心が許せる方に相談されるのも、いいことだと思いますよ。」

医者の胸元からミッキーマウスの小さな刺繍が見えた。こいつには何を言っても無駄だ、と思った。

自室の扉を開くと、つけっぱなしだったステレオからロック調でアップテンポな音楽が流れていた。うんざりしてベッドにバッグを叩きつけて、自分の体もベッドに叩きつけるように投げだす。バッグの中で携帯がヴーヴーと唸っているが無視する。どうせ彼からの電話で、今日も毒にも薬にもならない話をするだけなのだ。無視しても何も問題はない。

さっきも少し触れたが私の彼は恥ずかしながらニートで、さらに恥を忍んで言ってみればパチンコで生計を立てている。昔同じテレアポのアルバイトをしていて、私がそこを辞めた後の飲み会でお持ち帰りされて、そんな、おそらく日本の若者カップルなれそめラッキングで上位を占めそうな理由で付き合い始めた。

そして日本の若者が今一番悩んでいるであろう「職がない」という理由で彼は悩み、私は日本の若者が二番か三番ぐらいで悩んでいる

るであろう「非正規雇用者」である。お互いまるで先が見えない。そして、お互い先が見えないことを一切口に出して議論することはない。

私は二十四歳、彼は二十六歳。私は女だから潰しが効くが、彼はもうそろそろいろんな意味でアウトだ。ちなみについ先日駆け落ちを提案された。彼は本当に無理なことを言う。私たちに必要なのは駆け落ちでなく心中なのではないだろうか。

それでも放置は可哀想なので携帯を取り出して、着信履歴にやっぱり残っていた彼の番号をリダイヤルする。設定されたコール音はなぜか別れを歌うもので、なんでこんなものを設定したんだと詰め寄ったことが一度あるが、その曲が好きだからとあっさりと返された。彼はそういう人間だ。悲しいさみしい会いたいそんな気持ちがいよいよ最高潮、というところで彼が電話に出た。

「ういー。」

「うい。何してたの？」

「いや、ゲーム。」

ふあいやー、あいすすとーむ、ばつよえーん。彼の好きなパズルゲームの音が背後から聞こえた。昨日も、そのまた昨日も、とかいつもいつも彼はパズルゲームをしている。RPGのように終わりが無いし、他にやることがないからだろう。

「へえ。」

「うん。」

そして途切れる会話。無理もない。お互いに話すことなどないのだ。厳密に言えば、話すべきことなら沢山ある。これからのこと、彼の就職について、私のストレスになっている沢山のわずらしいこと。

電話をするのは、ただ毎日の習慣。

「ねえ。」

「うん？」

相変わらず背後からゲームの音がする。話すべきことはたくさんある。それでも話さないのは、これからのことについて話せば彼の就職の話になる、私の仕事のことについて話せばそれは無職の彼に對しての当てつけのようになる。前までは無理して当たり障りのない仕事の話から家の猫の話までしたが最近はそれも尽きてしまった。

「やっぱりなんでもない」

いつそのこと病院に行ったことを言おうかと思ったけど心配するだろう、というよりも何もかも面倒なので、「なんでもない」でその先をシャットアウトした。ほら、話すことなど何もない。

それでも彼は最初のうちは真面目に職を探していたのだ。探して、落ちて、探して、落ちて、彼は堕ちた。きっと今はどん底なんだ。あとは浮き上がるだけなんだ。私はそう思っただけでずっと待っている。浮き上がるときを。浮き上がった彼を見上げるときを。でも現実是非情で、彼は堕ち続ける。

私はほんの少し、でもすごく遠いところから彼にひたすら手を伸ばす。それは、食事に行けばさりげなくお金を出してあげたり、タバコ代と言って大目にお金をあげたり、そういう、なんだかお金がらみの生臭いことだけ。言葉はもうあげ尽くした。あなたを見守っている、支えていく、私がいるからがんばって。でもそれじゃあ、底の底にいる彼を救いだせない。愛だけじゃおなかは膨れない。

「金の切れめが縁の切れめ、つてのはね、あれはね、解釈が逆なんだ。金が無くなると女にふられるって意味、じゃあ無いんだ。男に金が無くなると、男は、ただおのずから意気銷沈して、ダメになり、笑う声にも力が無く、そうして、妙にひがんだりなんかしてね、ついには破れかぶれになり、男のほうから女を振る、半狂乱になつて振つて振つて振り抜くという意味なんだね、金沢大辞林という本に依ればね、可哀そうに。僕にも、その気持わかるがね」……以上、太宰治の人間失格より引用。

その通り。私にもその気持ちが分かる。ただ彼は降つて振つて振り抜くこともできないほどに意気銷沈してダメになつてしまった。

「あのさあ。」

「さつきつからなに。」

「駆け落ち、するかあ。地獄に。」

それでもそんな意気銷沈してダメになつた彼が大好きだ。情性だ依存だと言われても構わない。なぜかどうしても離れられない。精神科にかかつて、薬もらつて、きつとそのうちうつ病か統合失調症かあるいは境界性なんちゃりんな病名をいただいて晴れてキチガイの仲間入りになつても、私は患つた精神で彼を思い続ける。

彼は知らない。私がそんな精神になつていることを。そして今、私が言つた駆け落ちのことも冗談ととらえる。あ、とらえた。笑つてる。電話の向こうで彼が笑つてる。でもそれでいい。彼が笑うならそれでいい。本当は地獄に駆け落ちできればどれだけいいことかでも彼が冗談だと思ふならしない。

これからもタブーに触れないように二人で生きていく。私は薬を飲んで病んだ心で彼を愛し続ける。

でもきつといつか私は逃げ出す。そのときは彼との楽しい思い出と一緒に、それこそ地獄にでも駆け落ちするつもりで。

もしかしたらここが地獄なのかもしれない。そんな思いが過ぎつた。

END

引用 「人間失格」 太宰治

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2944o/>

駆け落ち地獄

2010年10月16日00時53分発行